

「失敗学のすすめ」

畑村 洋太郎著、講談社、255 頁

ISBN 4 - 06-210346-X (定価 1,600 円 + 税) 2000 年 11 月 20 日発行

〔目次〕

プロローグ	失敗に学ぶ
第一章	失敗とは何か
第二章	失敗の種類と特徴
第三章	失敗情報の伝わり方・伝え方
第四章	全体を理解する
第五章	失敗こそが創造を生む
第六章	失敗を立体的にとらえる
第七章	致命的な失敗をなくす
第八章	失敗を生かすシステムづくり
エピローグ	失敗を肯定しよう



本書は、長年、大学において機械設計について指導してきた著者が、自分の体験を含めて失敗の定義・種類から、失敗の生かし方や防ぎ方まで、失敗について一般向けに解説した書である。

著者は、既刊の「続々・実際の設計 - 失敗に学ぶ - (日刊工業新聞社、1996.10 発行)」において、本書のネタとなった設計の失敗例をわかりやすく紹介しており、現代のマニュアル化された技術や組織で、私たちが陥りやすい落とし穴に警鐘を発信している一人である。

本書では、失敗の法則性を理解し、失敗の要因と致命的な失敗に至る前に未然に防止する術を身につける、「失敗に学ぶ」ことの大切さを説いている。繰り返される失敗を否定的にとらえるのではなく、前向きにプラス面として有効利用し、失敗から得た経験を新たな知識として生かす趣旨が全章こめられている。

一般に、失敗を防ぐためには管理を強化しなければならないように思えるが、想定外の異常事態が発生した場合には無力になるという。著者は、さまざまな事態を想定し、変化に柔軟に対応できる人の教育と組織づくりの重要性を主張している。失敗情報は伝わりにくく、時間が経つと減衰するとい事実から、社会全体で失敗を減らしていくには、失敗の原因(背景要因)や経過などを分析し、誰もが共有できるデータベースを構築する必要があると力説している。「企業のコスト競争」「不祥事に対する隠ぺい体質」「失敗に対する減点主義の風土」「失敗を恥じる文化」など、わが国の発展を憂慮する方には一読の価値がある。

なお、蛇足であるが「失敗学」の命名は、評論家の立花隆が名付け親である。